

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520023

研究課題名（和文）

スピノザの自然哲学の全体像に関する研究

研究課題名（英文）

Research on philosophy of nature in Spinoza

研究代表者

黒川 勲 (KUROKAWA ISAO)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：20264319

研究成果の概要（和文）：本研究においては、スピノザの自然哲学の全体像に注目し、西洋哲学・科学の歴史的な背景を視野に入れて、スピノザのコナトゥス論の意義の解明を目指す。研究成果として、スピノザの哲学はコナトゥスの現象、力の現象の哲学であり、認識論的・倫理的にコナトゥスは「現実性」の基盤であることが明らかとなった。また、スピノザの哲学体系・自然哲学において、スピノザの方法論の内的・反省的特徴を示しえた。

研究成果の概要（英文）：In this Research I would try to understand Spinoza's theory of Conatus. For this purpose I would examine Spinoza's philosophy of nature through 17th European philosophy and science. The property of Spinoza's philosophy signifies that Spinoza's philosophy has character of phenomenon of power and Conatus. Spinoza's recognition of epistemological and ethical reality is based on his theory of Conatus. And Spinoza's philosophical method signifies the reflexive knowledge of reality.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：西洋哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：スピノザ哲学

1. 研究開始当初の背景

申請者は、スピノザ哲学において特に「自由」がその目的であり、スピノザのいう必然的自由の基礎づけこそが、スピノザ哲学の全体を把握する核であると確信し、研究開始当

初から探求を行っている。その際、自由の基盤がいわゆる「コナトゥス (Conatus)」にあり、しかもコナトゥスの解明のためには物体論・自然学的なアプローチが不可欠であるとの着想をえた。

すなわち本研究の目的は、スピノザにおけるコナトゥスの実相を解明するために、ホッブス、デカルト、及び中世哲学の自然観・物体論との比較研究とその成果を踏まえて、さらにスピノザの自然学的著作のすべてを包括した上で、17世紀科学革命との関係を新たな視点として導入することによって、スピノザ哲学における自然哲学の全体像を明確に描き出すことにある。

(1) 1970年代以降、欧米においても、スピノザ研究は「スピノザ・ルネッサンス」と呼ばれるほどに高まってきているが、マシュレによるマルクスとの比較、ドゥルーズの「表現」に注目した研究などを初めとする、いわば自然主義的・構造主義的な探求が主である。本研究も大きくはこの文脈の中に位置づけられる。また、スピノザのコナトゥスの実相を解明するために、ホッブス、デカルトとの関係を考察することは従来の研究の定石的なアプローチである。同様に、昨今スアレスに代表される後期スコラとの関係に注目した研究が国内において見受けられるようになってきている。その際、物体論・自然哲学に注目することも新規な観点とは言い難い。

(2) しかしながら、従来の研究はスピノザの独自性を際立たせるあまり、これらの哲学との連続性・哲学的連関を軽視している傾向がある。なかんずく、スピノザの物体論・コナトゥス論・自然哲学を論じる際に、スピノザの自然学的著作のすべてを包括した上で、かつ17世紀科学革命を視野に入れた研究はほとんどなされていないのが現状である。

(3) 本研究は、内外の関連する研究動向の大きな文脈の中に位置づけられるが、各々の

哲学者の自然観との比較を通して、中世哲学・ルネサンス期の自然哲学を含め西洋哲学史の中にスピノザを明確に定着することに貢献しようとする。なお、スピノザの自然学的著作のすべて（『往復書簡集』におけるボイルとの化学論議、未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』）を包括した上で、かつ17世紀科学革命との文化的関係の吟味による考察は国内では、工藤喜作氏、藤本吉蔵氏の先駆的な論考が僅かにあるのみである。

2. 研究の目的

(1) スピノザのコナトゥス論がホッブス・デカルトの強い影響下にあることは内外の研究者によって指摘されている。しかしながら、スピノザがホッブスの物体論のどの部分からコナトゥス論を取捨選択したのか、またデカルトが次第に関心を失ってゆくコナトゥス論を、それと知らずながら彼の哲学の中に消化吸収したのかについては解明が十分ではない。また、スアレスにおける実体的形相との関係、ブルーノ、カンパネラ等のルネサンス期の自然哲学との関係もスピノザを哲学史に位置づけるためには不可避の課題である。

(2) 本研究では、これまでの研究成果を踏まえ、新たにスピノザの自然学的著作のすべてを包括した上で、かつ17世紀科学革命を視野に入れた研究を行い、集中的に精査することによって、スピノザにおける物体論、コナトゥス論、ひいてはスピノザの自然哲学の全体像の解明を目指す。具体的には、以下の課題を解明することとなる。

①ホッブスの物体論『De Corpore』とスピノザの物体論との比較、デカルトの物的世界とスピノザの物的世界の構成に関する

比較及びコナトゥスの意義の抽出

②スアレスにおける「実体的形相 (forma substantialis)」のスピノザの実体論及び物体論との関連の検証

③スピノザ『往復書簡集』におけるボイルとの化学論議の精査による、17世紀科学革命における「原子論」、「粒子論」との比較検討

④スピノザの未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』の試訳及びデカルトの光学、パスカル等の確率論との比較検討

3. 研究の方法

本研究は、ホッブス、デカルト及びスアレスとの比較研究を踏まえ、さらに新しい視点として、スピノザの自然学的著作のすべて(『往復書簡集』におけるボイルとの化学論議、未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』)を包括した上で17世紀科学革命との関係に注目したものであるから、本研究の研究計画及び研究方法の概要は次のようになる。

(1) ボイル、ホイヘンス等の17世紀科学革命期の科学論・自然哲学に関する西洋科学論及び西洋近世哲学関係図書などの資料の入手と分析を行う。

(2) ボイルに関しては、『懐疑の化学者』、『形相と質の起源』、『原子論哲学について』等の科学論・自然哲学的著作を中心に「原子論」、「粒子論」をはじめとした「物質理論」を正確・緻密に解析して、明確に抽出する。ホイヘンスに関しては、粒子論に対する「機械論的光の波動説」をスピノザの光に関する説と

比較検討する。

(3) スピノザの『往復書簡集』、未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』の試訳を行うとともに、17世紀科学革命における「原子論」、「粒子論」との比較検討、デカルトの光学、パスカルの確率論との比較検討を行う。

(4) ホッブスに関しては物体論；『De Corpore』の精査と文献・先行研究の資料収集に努め、一方スピノザに関してはスピノザ哲学の成立史に関係する文献・先行研究を網羅的に収集する。

(5) デカルトに関しては物体論；『Principia Philosophiae』、『Meditatio』、『宇宙論』の精査により、デカルトの物体的世界の構成を抽出し、スピノザのそれと比較考察する。

(6) スピノザの思想形成の初期・スピノザのスコラ的素養に影響を与えた17世紀オランダのスコラ哲学者アドリアン・ヘーレボルトのテキスト(主著『Meletemata philosophica』(1654年初版と1665年版)と『Philosophia naturalis』(1665年版))の該当個所の翻訳を行う。

(7) スアレスに関しては、国内の研究・翻訳が十分ではないことから、Suarez『Opera Omnia』の物体論・運動論の該当個所の翻訳を行い、「実体的形相」・「質料」などの観点から正確・緻密に解析して、明確に抽出する。

4. 研究成果

本研究の具体的成果は以下のようにまとめられる。

(1) まず、スピノザの自然哲学の全体像、自然哲学と形而上学との関連及び哲学史・科学史的な位置づけを明確にし、本研究の基礎を得る取り組みは以下のようにまとめることができる。

①ボイル、ホイヘンス等の17世紀科学革命期の科学論・自然哲学に関する西洋科学論及び西洋近世哲学関係図書などの資料の入手と分析を行い、特にスピノザの『往復書簡集』で取り上げられるボイルとの関係に関して、スピノザとボイルの主張の比較検討を行った。

②スピノザの『往復書簡集』の内容を吟味し、形而上学類と科学類に大きく大別し整理するとともに、未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』の書誌学的確認を行うとともに、一部の試訳を英訳書を参考におこなった。

③アドリアン・ヘーレボールト『Philosophia naturalis』及びスアレス『Opera Omnia』の物体論・運動論に関する該当個所の翻訳を行った。

④スピノザ『エチカ』の主題・体系的構成を整理確認するために、ドゥルーズ、メイヤー等の研究書の翻訳及び比較検討を行った。

(2) 上記(1)の取り組みに基づいて、スピノザのコナトゥス論及び自然哲学の全体像に関する研究成果と今後の展望は以下のようにまとめられる。

①スピノザの「力」概念の中心となるコナトゥスの位置づけを体系的に把握するために、まず認識論的に「想像力」との関連の問題に注目することが重要である。その成果として、スピノザのコナトゥスは認識論的にも哲学

体系の基盤であるとの再確認を行い、「力の現象」としてのスピノザ哲学の特徴を認識論的側面からも明確にしえた。

②『エチカ』第2部に見られるスピノザの物的世界的世界の枠組みの考察を行った。その結果、スピノザの物的世界は単純物体を基本単位とする階層的な世界であることが明らかになると同時に、実体一様態関係から統合的な世界像を結ぶものであることが明らかになった。ホッブス及びデカルトの物的世界とスピノザの物的世界の構成に関する比較については、上記「力の現象」としてのスピノザ哲学との理解を比較の支柱として更なる検討が必要であるが、スピノザの統合的世界観はホッブス及びデカルトに比較して、一層徹底したものであるとともに有機的な統合を企図したものであるとの展望を得ることができる。

③スピノザのコナトゥスの位置づけを体系的に把握するために、倫理的に「悪の現実性」と「感情」との関連の問題に取り組んだ。その成果として、スピノザのコナトゥスは倫理的にも哲学体系の基盤であるとの再確認を行い、「不可避的な悪の現実性」と「善への方途」としてのスピノザ哲学の特徴を倫理的側面からも明確にしえた。

④スピノザの自然哲学を含めた哲学全体の「方法」概念を明確化するために、方法論的著作『知性改善論』に見られる「実在の定義」、方法確立の中心となる「真の観念」の特徴の分析を行った。スピノザ哲学における方法とは因果関係の徹底を企図した、内的・反省的方法であることを明確にしえた。このスピノザの特徴的な内的・反省的方法はスピノザの自然哲学・科学論の方法論にも影響を与え、

特にスピノザ哲学体系全体における総合的な
な置づけの核となりうるとの展望を得ること
ができる

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 黒川勲, スピノザにおける悪の現実性,
大分大学福祉社会科学研究所紀要 12 号,
査読なし, 2009, pp. 37-48
- ② 黒川勲, スピノザにおける想像力につい
て, 大分大学福祉科学研究科紀要 10 号,
査読なし, 2008, pp. 1-11

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒川 勲 (KUROKAWA ISAO)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号: 20264319

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし